

古典学習の新しい可能性の模索

『明解古典講読 日本の説話』の挑戦



伊坂淳一

(『明解古典講読』編集委員)

高等学校国語科における古典学習の目的は何であろうか。世羅博昭「古典」(大槻和夫『国語科重要用語300の基礎知識』明治図書二〇〇一年)は、次のように簡潔に述べてくれている。

- (1) 「総括的目標」新しい文化創造の鑑として古典を読む意義を理解させるとともに、古典に親しむ態度を育てること
 - (2) 「内容に関する目標」古典の側から現代を相対化して、古典の中に日本民族の普遍的なものの方・感じ方・生き方を発見したり、また、現代が失ったものを発見したりすることを通して、現代を生きるための糧を得ること
 - (3) 「言語面に関する目標」古典の言語表現を読むことを通して、言語に対する感覚を磨くとともに、日本語についての理解を深め、言語生活の改善に役立つこと
 - (4) 「技能面に関する目標」古典を読解し鑑賞する基礎的な能力を育てること
- そして、「(4)の目標は(2)や(3)、ひいては(1)の目標を達成するための手段であるが、高校では、手段が目的化している実践が多い。」と指摘しているが、これはかなり重要な意味をもっている。
- つまり、古典学習材は本来、子どもた

ちの世界認識の枠組を広げたり、ことは理解し表現する力を高めたりするための手段であったのだが、それを読み解くこと自体が目的化してしまっているのではないかと危惧しているのだ。

そうになると、古典の文章を「読める」ようになることが当面の目的とならざるをえない。もちろんこの場合の「読める」とは、かなりはしょった言い方をすれば、現代語に置き換えられること(≡現代語訳化)である。そして、古文単語や古典文法は覚えることが必要なものとなえられるようになり、古典学習自体が暗記分野にまた一歩近づく。その結果、子どもたちの古典離れはさらに進んでしまうことになる。

このような現在の古典教育の閉塞状態を何とかして打ち破りたいとの思いから、今回の『明解古典講読 日本の説話』の編集作業においては、次のような困難な課題を自らに負わせることとなった。

- 1 学習者が楽しく読めて、古代人の世界にさらなる興味を感じ取ることができる教科書

- 2 教室での学習において、内容理解のために過度のストレスを感じることなく、スムーズな授業展開が可能な教科書

3 古典学習を通して優れた言語表現のおもしろさや楽しさを感じ取ることができ、同時に学習者自身の言語運用能力を高めることができる教科書

楽しい古典教科書

第一の課題としてあげた、学習者が読んで楽しい古典教科書であることの最大の条件は、なんといっても「素材」のおもしろさである。幸いなことに本教科書の編集にあたっては、平成8年度版「古典講読 日本の説話」がベースにあった。ここに採録されている一つ一つの説話の内容的なおもしろさは群を抜いている。例えば、「百鬼夜行」「桜の精」「亀の恩返し」「夢を買う」「呪いを知らせた犬」「玄象の琵琶」「舞茸」など、人間世界と異形の世界との接点を描いたり、怪奇現象や非現実的世界を描いたりする作品は、ストーリー展開そのものに思わず引き込まれてしまう。「蜂飼いの大匠」「袴垂と保昌」「歌詠みの徳」「絵仏師の執心」「絵師と大工」「笛吹き成方」などに描かれた、際だった人間の興味深い行動や考え方には、驚いたり、納得したりの連続である。

また、「応天門炎上」「義家と宗任」「行

成と実方」などは、歴史的な人物や事件に取材し、それに対する鋭い観察や時には辛口の批評を含んでいる。「恵心僧都の母」「後の千金」「姨母捨山」などには、人間の感情の機微や言動の規範、人生に対する教訓などが見事に表現されている。これらを含めた多くの学習材は、古代人の思考世界や超越的存在への思いも含めた世界観、あるいは歴史的事実の背景やその文学的作品化への熟成過程などに焦点を合わせることによって、総合的な学習へと発展していく、そのきっかけにもなりえる。

これだけの素材がそろっているのだから、あとは料理人の腕次第である。学習材の単純な羅列に終止することなく学習の進展を考慮して全体の構成を整えること、カラーページを拡張して学習に役立つ写真や図版をふんだんに取り入れること、活字のポイントを大きくすることも含めて見やすいレイアウトを試行することなどなど、課題は尽きなかった。その多くは形にすることができたと思う。

新しい学習活動を提案する古典教科書を

第二の課題は、冒頭に引用した世羅博

昭が挙げる古典学習の目標の(1)～(3)を実現できる教科書を目指すことであった。それには、授業時間の多くを現代語訳と古文単語・古典文法に割かれている実状に代わる、新しい授業形態を提案する必要がある。

そこで考えたのは、古典学習の導入段階においてよく行われている「現代語訳傍注」を、さらに徹底することであった。その現代語訳を横目でにらみながらであれば、古文本文がある程度はすらすらと読み進めていくことができるようにということである。

進学受験指導のクラスや国文学方面を目指す子どもへの指導においては、物足りなさが残るかもしれない。しかし、現実の「古典講読」教科書は、その採録されている素材にこそ違いはあれ、多くはほぼ同じようなつくりであることを考えると、多様な選択肢を提供することも教科書編集者としての責務であると思う。

「古典講読」は、必ずしも大学進学を目標としない子どもたちや、高校二年生以前を対象とする科目であってかまわない。むしろそのような子どもたちこそ、日本古典のおもしろさへの水先案内役となるべきである。そのためには本文の「解

「読」でつまづいたり、古文単語や文法の暗記で厭気を起こしたりさせたくない。

いかにえれば、授業時間の多くを内容理解と批判的な読みにあてて欲しいとの思いなのである。したがって、本文解説の負担軽減と引き替えに、「学習の手引き」を大幅に拡充することにした。原則として一ページをまるまる手引きにあてるとするのは、「古典講読」教科書においては、ある意味で異例である。もちろんここで、注目して欲しいのは、その量的な拡充だけでなく、やはり内容である。この点は次に述べる、第三の課題と密接にからんでいる。

「つとばの力をつける古典教科書」

本教科書の編修作業が相当進んでいた段階で、経済協力開発機構（OECD）が二〇〇四年に実施した国際学習到達度調査（PISA）によると、日本の学力が著しい低下傾向にあることとということが報じられ、話題となった。特に八位から十四位に大きく転落したというのが「読解力」であった。

PISA 調査の対象となった「読解力」とは、「自らの目標を達成し、自らの知

識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」である。

それはむしろ「総合的な学習の時間」によって育てようとした情報リテラシーであり、テキストに書かれていることを解積したり価値づけたり批判したりしつつ、その理解をもとに自分が考えたことを論述したり、表現したりする力である。

この「読解力」は国語科の中だけで育成されるものではない。実際に文部科学省『読解力向上に関する指導資料』（二〇〇五年十月）も、その指導例として他教科の例を豊富に挙げている。現在では「PISA 型読解力」という用語もかなり浸透してきたように思う。

国語科以外の教科で PISA 型読解力を高める指導が可能であるなら、国語科中の古典においても同じことができなければならない。新しい『明解古典講読 日本のお話』の「学習の手引き」が目指したことは、この PISA 型読解力でもあるといえるのではないかと考えられる。

つまり、「学習の手引き」を順次行うことにより、各お話の内容を簡潔に要約したり要点を端的に書き出したりするこ

と、また、そこに描かれている古代人の物の見方・考え方を批判的に受け止めたりと、古代世界のあり方について対比的にとらえたりすること、あるいは、物語の描かれ方そのものの特徴や説話採録者の視点を考えたりすること、などが授業の中で自然に実現されるような学習課題の提示に努めた。

そして、自分が考えたことの表現方法を明示的に示すこと、情報を分析するための視点や考えるためのヒントを具体的に示すこと、学習者同士の意見の交流を促すように配慮することなどにも意を注いだ。

「古典講読」の新しい可能性を模索する試みは、まだはじまったばかりである。多くの方の忌憚ないご意見により、この教科書がさらに成長することができたら、それこそ教科書編集者としての無上の喜びである。

伊坂淳一（いさかじゅんいち）千葉大学教育学部と教育学研究科で担当している授業の中で、古典教育の現状を克服して新しい方向を目指す学習材について、学生諸君とディスカッションを続けている。この教科書にも、多くの意見を探り入れることができた。